

29P1-pm155

日向薬事始め（その13）－日向における種痘の歴史再考（I）

○山本 郁男^{1,2}, 岸 信行^{2,3}, 宇佐見 則行⁴（¹九州保福大薬, ²九州保福大・QOL研, ³宮崎・日向・富高薬局, ⁴奥羽大薬）

【はじめに】正書によれば、我が国における種痘の始まりは、嘉永2（1849）年7月（6月の説あり）、モーニッケによって長崎にもたらされた痘痂（かさぶた）が、同年7月17日、佐賀藩医榎林宗建によって三児に接種され、宗建の子、健三郎のみが感作した。これが我が国における最初の牛痘接種であるとされている。しかるに、日向のみは、不思議なことに記載がない。そこで本報ではその原因を追及したところ、いくつかの疑義が生じた。本報では、その経緯を報告する。

【結果および考察】日向の種痘の歴史を史料によれば、大きく4つに分けられる。

①人づくり風土記（宮崎）の「宮崎県史」よると、嘉永から安政の頃にかけて日向で最初の種痘が行われた。その人は碓井玄良、若山建海（若山牧水の祖父）と福島邦成の3人である。②篠原秀一著、都城庶民史によれば、嘉永2（1849）年、領主第24代島津久本の命を受け、前田杏齋が種痘を行った。③嘉永3（1850）年、上記福島邦成は長崎にて蘭人に就いて種痘法を学び、持ち帰って里人に接種。④若山建海と福島邦成の二人の医師が協力、建海が嘉永2（1849）年1月、長崎に行き、邦成がいた宮崎（延岡藩の飛地）にて接種とある。以上、4つの説があるも確証を欠く、特に④は有力であるが、嘉永2（1849）年1月とあり、【はじめに】に記した嘉永2（1849）年7月よりも6ヶ月も早い。もし、真実ならば日本種痘史を書き換えなくてはならない。

【文献】山本郁男、宇佐見則行、岸 信行、日向薬事始め（その12）－明からの二人の帰化医人、何欽吉と除之遯、並びにその周辺一、日本薬史学会 2011（名古屋）要旨集 p29（2011）